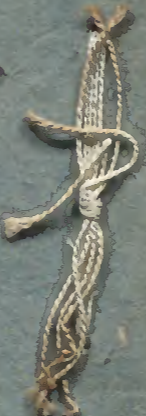


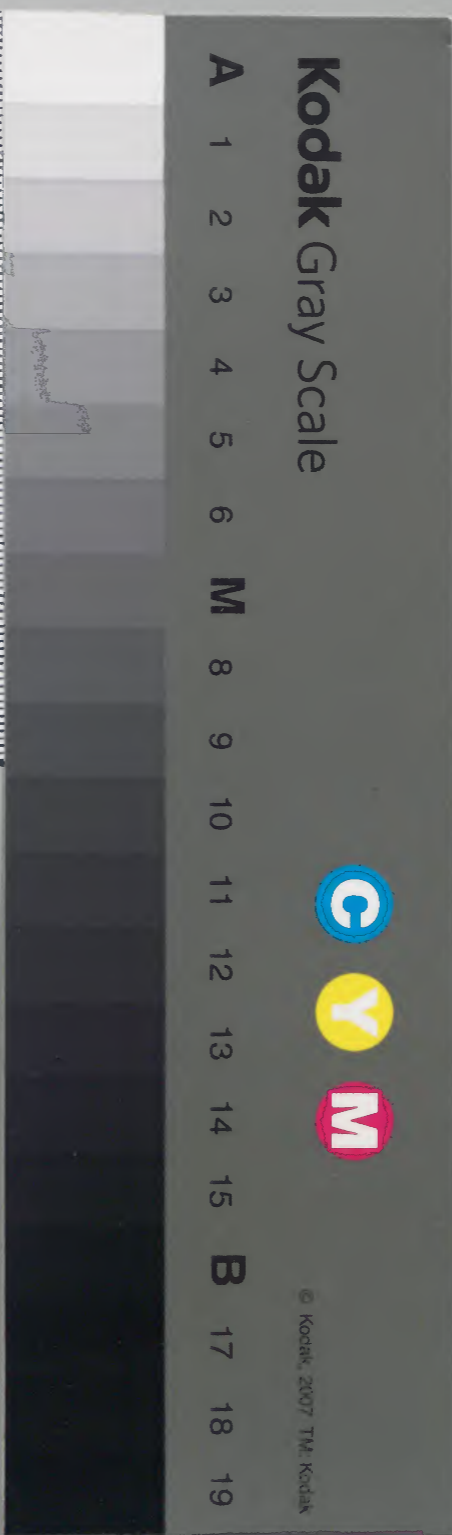
宣胤方記

廿二



内閣文庫		
函	冊	架
162	22	241
和書類		42317

内閣文庫	
番號	和 42317
冊數	22 (21)
函號	162 241



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

長壽堂傳奏

長壽堂傳奏

權大納言判

長壽堂傳奏



表書り  
勾当四條との所  
如少胤  
初許し由有る事

長海堂書誦名事以長海法中關而  
被補大法師家多也  
之

宣胤

修南院僧正の所

以爲當年左衛事与光出を編旨  
如常の傳奏也下知事  
中沙汰中此朱の事後  
長誦堂僧衆寺官等謹言上

九月廿日信五朝下未持某之

右當堂大破事自應仁一乱刻連被侵兩

露令朽損之門舊院様御時雖歎申

依不被加御修理忽木御堂令顛倒

畢自其砌御本尊丈六阿弥陀像并觀勢

三尊地藏等雖奉移置御影堂内校

少之間連臺以下奉取放之桑歎而猶有

餘者哉殊近日御堂破壊之間為

舊院様御佛事被加御修理御本尊

被奉昇蓮臺者  
長和可為大慶者也

次御領等雖有名無實御本役以下  
如先規可有其沙汰之由被成下御奉書  
可致催促所詮以此旨被經御奏聞被全  
休造同知行等者跡為抽御願精誠粗  
謹言上如件

文龜元年九月日

長福堂の修理此事名々中状にて

申入り候に被成候事

表出り候事

同日此處事有之是也供僧再信並郭

長福堂破損可加修理

事也奏聞以來 求堂領 初好  
申候事沙汰方々 醫被申 催促可  
し申乞非之在也 由之仰り也之  
事

九月廿二日

清高

大御方補所

刀共三百廿五等も出 為奉給之料所少事  
之等々 廿六日之迄也

二

七

欽御領等雜... 如先規可... 可致... 欽御領等雜... 如先規可... 可致... 欽御領等雜... 如先規可... 可致...

九月廿五日... 欽御領等雜... 如先規可... 可致...

此講堂の由より... 欽御領等雜... 如先規可... 可致...

し... 欽御領等雜... 如先規可... 可致... し... 欽御領等雜... 如先規可... 可致... し... 欽御領等雜... 如先規可... 可致...



し教書 尚書内納ありて久しき所  
やう堂のりたりは名目所 信也

のりたりは名目所 信也

のりたりは名目所 信也

のりたりは名目所 信也

のりたりは名目所 信也

四月廿七日信連朝下果中け子細御状より在候はれ共は候

長誦堂僧名公文龜壽謹言上

右子細者長く歡樂仕へ間雖加養性更以  
不得只減く兼難存存仕へ間親類章夜又  
彼公文職ある事与棄仕作候事如先下  
引補任者可恭畏存志也仍謹言上如件

文龜二年四月日

尚書内納ありて久しき所

のりたりは名目所 信也

のりたりは名目所 信也



研堂向當再借名以文徵事

奉少所也 仍達如彼

延應二年四月廿九日在處尉留款  
上 僧名以文章夜子殿

少事再少綴微同

少月三日信五朝下 少事夜宿余宿寺持集

長誦堂衆僧等謹言

右當御領之用基嚴重之予細者每度云上事在舊  
異于他靈場也長日不返之勤行者令祈天四海業  
春秋二季之彼岸者併佛果芒自提御法事也仍春季  
之日者以信佛衆勸彼之懺法誦秋季七書七夜者  
僧以恭親也念佛規式阿弥陀經一册十二卷元引  
無退悔經之卷數積而予餘者莫大之沛善  
物之亂以未方之新不統也初行多事之關意不款  
之殊者伊自良在役多取也若雖為御本役  
上年春下り之集速或至之雖然秋七日者  
之佛名在教公故終以三四日如形雖奉修  
哈若佛意難測而詮是未顯急度被  
奏國隆の事役記其者名申之勵私力

文永二年八月日  
 補任志のりつこいさきしりし又長海堂より  
 この中状にりし妹等の出立事ハ伊自良茂の  
 御沙汰在し 若併可為御祈禱意の程  
 二月十三日御経供養是又退時終る事勿体  
 令儀式名永可者断絶事歎々餘者也  
 五三輩雖令堪忍難期来日も間度不彼  
 知堂儀法度故実也其得者  
 舊例至不叶者能為三日三夜執行し事

文永二年八月日  
 補任志のりつこいさきしりし又長海堂より  
 この中状にりし妹等の出立事ハ伊自良茂の  
 御沙汰在し 若併可為御祈禱意の程  
 二月十三日御経供養是又退時終る事勿体  
 令儀式名永可者断絶事歎々餘者也  
 五三輩雖令堪忍難期来日も間度不彼  
 知堂儀法度故実也其得者  
 舊例至不叶者能為三日三夜執行し事

文永二年八月日  
 補任志のりつこいさきしりし又長海堂より  
 この中状にりし妹等の出立事ハ伊自良茂の  
 御沙汰在し 若併可為御祈禱意の程  
 二月十三日御経供養是又退時終る事勿体  
 令儀式名永可者断絶事歎々餘者也  
 五三輩雖令堪忍難期来日も間度不彼  
 知堂儀法度故実也其得者  
 舊例至不叶者能為三日三夜執行し事



室の長く名懸つて之を法師目録

光慶僧正名を以て之を

向苗内侍名を以て之を

許し重有の事

長誦堂長誦衆事不致御大法師

圓法也

十月廿七日  
左記

後南院僧正名

右記也

目録に於て是を任僧也

長誦堂僧衆寺官等謹言上

右堂御願し用基者泰後白河院新願して嚴重

無事靈場本尊の元量壽如来の三尊地蔵の尊容現佛を

希孟申し列の伊勢の禰乃方神日勸請して現南二世佛

を也也因茲武は崇敬也と云ふも一也仁一乱の末教在の

願知を名無事の中僧衆地蔵志遠感し條可御寄進也

也存戸の中内名許ありといふも一也年月を送る

りの志勸をいふも一也爰丹後國宇津彦往古より

代の堂願として長日不退し佛前灯油絶物あま定を

卜い此寺持流本役を如形枕ぬは者也と云ふ年の堂中

の事いふる事の諸役を償寺用と云ふといふが要也白

昔大捕身致之意と掃りし形所の氏代なりかし  
 別堂申述成り次第也然し形忽退膝し居つこと久  
 事何れも慧表の形所より争競を遠乱何中  
 城の奏因を録し是後密に下出する僧侶も結り  
 ありんかとの起謗の上の件

三年卯月日

(Faint bleed-through text from the reverse side, including characters like 文、武、武、武、武、武)

經丹後國高津庄の事

武家ありぬの事なりし者毎の  
 也なりし事なりし者毎の  
 披ありし事なりし者毎の

小右院丹後國高津庄に役者海老多  
 り新なりし形所ありし者毎の  
 形所ありし者毎の  
 の様事なりし

印文亀三四廿三

南院雜掌

(Faint bleed-through text from the reverse side, including characters like 文、武、武、武、武、武)

尋下長諡堂領丹後國宮津庄事礼以前者毎月  
定詳申礼中國方遠礼已未年中万正自等持渡靴の法  
頭方彼寺知行なり此庄彼に儀於御堂勒行行事  
一日御折十二日御本願講十五日本言講廿二日誓古海  
川編以上毎月儀の如く年中長日例時懺法佛位  
之僧衆不勤勒行儀等持渡僧御堂奉勒事  
儀々此方可御披露仍相言上如件  
辛四月日 長治寺

尋下長諡堂領丹後國宮津庄事礼以前者毎月  
定詳申礼中國方遠礼已未年中万正自等持渡靴の法  
頭方彼寺知行なり此庄彼に儀於御堂勒行行事  
一日御折十二日御本願講十五日本言講廿二日誓古海  
川編以上毎月儀の如く年中長日例時懺法佛位  
之僧衆不勤勒行儀等持渡僧御堂奉勒事  
儀々此方可御披露仍相言上如件  
辛四月日 長治寺

尋下長諡堂領丹後國宮津庄事礼以前者毎月  
定詳申礼中國方遠礼已未年中万正自等持渡靴の法  
頭方彼寺知行なり此庄彼に儀於御堂勒行行事  
一日御折十二日御本願講十五日本言講廿二日誓古海  
川編以上毎月儀の如く年中長日例時懺法佛位  
之僧衆不勤勒行儀等持渡僧御堂奉勒事  
儀々此方可御披露仍相言上如件  
辛四月日 長治寺

尋下長諡堂領丹後國宮津庄事礼以前者毎月  
定詳申礼中國方遠礼已未年中万正自等持渡靴の法  
頭方彼寺知行なり此庄彼に儀於御堂勒行行事  
一日御折十二日御本願講十五日本言講廿二日誓古海  
川編以上毎月儀の如く年中長日例時懺法佛位  
之僧衆不勤勒行儀等持渡僧御堂奉勒事  
儀々此方可御披露仍相言上如件  
辛四月日 長治寺



長誨堂御書別  
 吉田庄役事任是親  
 後才庄中  
 十二月廿日  
 富秀

大御大輔

長誨堂執事文唐書謹言上

右より細若若別ノ新  
 而吉田庄本役事  
 右指是志代  
 無お遠移り  
 知去事ノ傍申  
 申して  
 申すは  
 申すなり  
 又津のゆき  
 申すは  
 津の  
 申すは  
 申すは  
 申すは

永正二年十一月日

長誨堂難掌謹言言上

長誨堂難掌謹言言上

領吉田庄本役  
 任是親  
 領吉田庄本役  
 任是親  
 領吉田庄本役  
 任是親  
 領吉田庄本役  
 任是親

永正二年十二月日



古書

日本書紀

卷之四

大和天皇二十一年

大和天皇二十一年

大和天皇二十一年

大和天皇二十一年

大和天皇二十一年

大和天皇二十一年

大和天皇二十一年

